姫と呼ばないで！

麻木いのり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
姫と呼ばないで！

【Nコード】
N5581U

【作者名】
麻木いのり

【あらすじ】
芹沢天音、16歳。記憶喪失で10歳から前の記憶がなくて、「少し先の未来が視える」というちょっとした超能力を持つ、自前の明るい茶髪と碧眼というところ以外は普通の女子高生――だった。路地裏で怪しげな人を見つけ、目の前で次々と使われる『魔法』を見てから・・・私の世界は一変した。
『異世界のお姫様』これが本当のわたしの姿？いえいえそんなの知りません、一般人ですから！！そう・・・どうでもいいから、姫だ

なんて呼ばないで！！！！

異世界への扉（前書き）

読んで頂いてありがとうございます。
のんびり更新の予定ですので、よろしくお願いします。

異世界への扉

私、芹沢天音の記憶の始まりは１０歳の頃、大都会のビルに囲まれているとこから始まる。

所謂、記憶喪失ってやつ。保護された時には自分の名前と年齢しか覚えていなくて、１０歳になるのに言葉もろくに話せない状態だったらしい。わたしを引き取ってくれた児童養護施設『希望園』の先生が教えてくれたことだ。

そして、私には不思議な力がある。

先の未来が視える、ちょっとした超能力みたいなもの。この力のおかげで危険は直ぐに察知できるし、テストの山なんかも張れちゃったりする。

ぱっと目につく容姿は自前の少し明るい茶髪と碧眼。だけど顔や体つきは日本人の平均と変わらない。

少し変わってるけど、それ以外はどこにでもいる普通の女子高生。施設と学校を行き来する中にバイトがたまに入るだけのありふれた生活を送る。将来の夢は幸せな家庭を築くことで、本当に平凡な女子高生なのだ。

私の暮らす『希望園』から徒歩で行ける近い高校、っていうのが進学校である『私立百合ヶ丘学院』。交通費や学費を削るために必死に猛勉強して、無事に学費免除を受けている。

そして、施設と学園までの近道として路地裏を使っているけど、も

う5月になると言うのに長い黒のコートに身を隠した、いかにも怪しい人が座って壁にもたれかかっている・・・。

人通りのない裏路地で、怪しげな人と遭遇する・・・だなんて、予知していそうな未来がどうして今目の前にあるのだろうか？そんな疑問を持ちつつ、近づくか通り去るか、それとも来た道を戻るか・・・どうしようかと思案する。チラリと黒ずくめさんを横目で見ると苦しそうに息をしているのが見えた。

仕方ない・・・、危なそうだけど予知していないってことは危ないことじゃないって判断していいだろう・・・。フラグじゃないことを願ってわたしは黒ずくめさんにそろそろと近づく。黒ずくめさんに近づくと、息を激しくしていて苦しそう。表情を見るためにコートのフードを取ると整った中世的な顔立ちで、輝かしい金髪をした外人さんが瞳を固く閉じて唸っていた。

「うわああ・・・、美人さん。」

思わずそんな言葉を口にしてしまったけど、この状況をどうにかしなければ。押えている右腕からは血が流れていて、コートを脱がして腕を見ると傷口はそんなに深くないらしい。

時刻は八時・・・、この外人さんをどこか横になれる場所に運ばなければいけないけれど・・・。救急車呼んでも大丈夫なのかな？でも傷も深くないし・・・。上空から声が聞こえたのは、そう悩んでいるときだった。

「みーつけた。」

ふわりと、その少年は十階以上もあるだろうビルの頂上から降りてきた。重力も衝撃もない、不思議な光景を目の当たりにして私は少し身を引いた。

「僕はクリストファー・アルフレッド。そちらに居るのはランス・シルヴェスターだよ・・・。」

少年はのんびりとした調子で名前を名乗りながら、こちらにゆっくりと近づく足取りを止めた。私の顔を見て驚愕の色を見せているけど、何かあったのだろうか。不思議に思っていると再び歩みを進め、私の顔をじっと見たかと思うと、その少年はわたしの前に膝を曲げ、頭を垂れた。その行動にぎょっとすると、彼は喋り始めた。

「ずっと・・・、探しておりました。アリシア姫・・・。」

えぇ？アリシア姫って、この人私に言ってるの？それより、何なのこの状況は・・・。左を見れば傷を負った人、前を見れば頭を下げた人がいるって・・・。

アルフレッドさんは頭を上げて私の顔をもう一度見てから、シルヴェスターさんの方へと近づく。傷口へ手を向け、彼は何かをボソボソ呟いた。すると、光の粒子が溢れて、何事もなかったかのように傷は消えていった。再び、不思議現象を見せつけられた私は口をぽっかり開けていると、小柄なアルフレッドさんは彼より少し大きいシルヴェスターさんをひょいと肩に担いだ。これ以上驚かせないでください！、と思っているのもつかの間の出来事。

アルフレッドさんは片手を前へかざした。謎の呪文を言うと、どこからともなく仰々しい扉が出てきて、自らその重そうな扉は開いていった。こちらはファンタジーなものばかり、世間で言う『魔法』

を立て続きに見せられてパニック寸前だ。

目眩がする感覚を感じながら、私は彼に手を引かれるがまま・・・、真っ白な扉の先へと進んで行った。そこに、違和感などなかった。

真っ白な光に足を踏み入れると、眩しい光が視界を遮った。目を思い切り閉じると、次第にその光はなくなり、周りの景色はガラッと変わった。緑に囲まれた庭？に着くとアルフレッドさんはシルヴェスターさんを芝生の上に落した。

「っわ、な、何してるんですか。」

私は慌ててシルヴェスターさんに駆け寄った。いくら、あの謎の力で傷が塞がったとしてももう少し丁寧に扱えないのだろうか。そう思っていると、シルヴェスターさんはうう・・・、と呻き声を上げるとゆっくりと瞳を開けた。

「・・・ここは？」

「おはよう、ランス。ここはフローレンス国第３庭園。」

「そうか・・・、戻ってきたのか。・・・そして、この女は誰だ？」

身体を起こして大きく伸びをしたシルヴェスターさんは人差し指を私に向けると、アルフレッドさんがその指を手のひらで叩き落とした。シルヴェスターさんへとアルフレッドさんの銀の目からは鋭い視線が向けられる。

「そちらはアリシア姫様だ。」

「っはあ！？・・・あの、１５年行方不明だったアリシア姫だと言うのか！？」

「そうだよ。」

私の知らないところでどんどん話が進みそうで怖かったため、口を挟むことにした。

「すいません・・・、それはそちらの思い違いでは？アリシア姫は15年行方不明なんでしょ？私は確かに記憶喪失で記憶は6年以降ないけど、歳は16歳。年数が合わないじゃない。」

もっともな意見をぶつけたと思っていると二人は微妙な面持ちで、アルフレッドさんは首を横に振った。

「記憶喪失・・・、ですか。そちらの世界とこちらの世界では時間の流れが違う。話を聞く限り、こちらの方が時間の進みは早いみたいだね。」

「・・・いやいや、本当に私なんかがお姫様な訳ないから！」

そうだ、こんなファンタジーなお話あるわけない。そう信じたい一心だけど、身をもって知ってしまった数々のファンタジーは嘘ではないよう。

「・・・でも、そうだな。よく見るとグレイス王妃に似ておられるな。その茶髪や碧の瞳、顔立ちなんかも・・・。」

ポツリとシルヴェスターさんは言った。グレイス王妃・・・、多分アリシア姫のお母さんだろう。アルフレッドさんはにこりと笑うとわたしに手を差し伸べた。

「アリシア姫、お城までご一緒してもらいますよ。」

その手は案に、逃がしませんよってことか。けれど、このよく分からない世界を一人で冒険するほどの勇気があるわけでもない。仕方なくその手を取ると、アルフレッドさんは満足そうに更に笑みを深めた。

城の大きな門を通ると、アルフレッドさんは城内の道中にこの国の説明をしてくれた。

ここは私の居た地球とは違う世界『プリモ』という異世界。そして、今いる国は『フローレンス国』という国で、アリシア姫はそのフローレンス国のお姫様だそう。

「この『プリモ』には、姫の居た世界とは違い魔法が存在します。魔法は努力でどうこうできるという訳でなく、生まれ持った才能が大きいか小さいかで大分変わります。

魔法使いも居れば、獣人も居ますし、魔王も居ますよ。そして、神様も居ますね。」

「か、神様ぁ!?」

魔王とかその辺は魔法使いが居る時点で居てもおかしくないなぁ、って思ってたけど・・・。神様が生きている世界?ということなの?

「今わたしたちがいる『人間界』、神様や天使、悪魔の集まる『天界』、そして魔王や魔物の住む『魔界』の三つがこの世界を構築しています。

まあ、6年間そちらの世界に住んで、魔法等とは無縁の生活を送っていた姫には理解し難いお話かもしれません。けれど、これがこの世界なんですよ。」

私の戸惑いを手の震えから悟ったのだろうか、アルフレッドさんは優しく話してくれた。

「えっと・・・、その話を聞く限り、15年前に日常で危険があってもおかしくない状況だったってことですか？そう、例えば魔王あたりが何かやってたり・・・。」

「ええ、勘がよろしいですね。15年前、人間界と魔界の間では戦争が行われている最中でした。そして、今日から調度15年前に魔王がこの城へ奇襲をかけました。その際に、姫は異世界へと転送される魔法をかけられました。姫が消えてから1年後に人間界は魔王を追い詰め、魔王は滅ぼされました。現在でも人間界と魔界の間には条例が結ばれております故、姫は心配なさらないでください。」

返事はあえてせず、二人の後を黙って着いて行った。どうにも『姫』と呼ばれるのはこそばかゆい感覚がする。そんな柄でも無ければ、器もない。いたって普通の女子高生なのだ、私は・・・。

そして重々しい扉の前でアルフレッドさんとシルヴェスターさんが止まる。そして、やっぱりその扉も独りでに開き始め、真っ赤な絨毯がまっすぐに伸びた先に誰かが座っているのが見えた。金のがっしりとした椅子に座る二人の頭には輝かしい王冠、きっと王様と王妃様だ。

「ナサニエル国王陛下、グレイス王妃様、お急ぎのお目通りで申し訳ありません。」

「クリス、それより・・・そちらは・・・。」

ナサニエル陛下は私を見ると目を丸くした。同じく、グレイス王妃とやらも口に扇子を当ててまあ、と声を漏らした。

「見たとおり、こちらはアリシア姫で居られます。」

「アリシア・・・アリシア姫なのか!?」

びっくりして何も答えられないまま茫然とした。どうして一瞬で、こんなにも懐かしい響きがするの?まるで、昔からそう呼ばれていたような・・・。はっとして、目の前を見据えた。真実を伝えなければいけない、私が何であるかだなんて分からないのだから。

「陛下、私は記憶喪失でここに住んでいた時の記憶もなく、あちらの世界に住んでいました。私がアリシア姫かは誰にも分かりません。」

「いいえ、確かめる方法ならあるわ。」

王妃様が席を立ち、階段をゆっくりと降りてこちらに向かってきた。王妃様はわたしの顔をじっと見つめて私の服に手をかけた。慌ててその手を防ごうとしたけれど、既に時遅し、私の鎖骨から胸元にかけてを露わにされる。

「・・・胸元に王家の痣があるわ。本当にアリシア姫なのね。」

そう言って王妃様は私を胸に抱き寄せた。いやいや確かに不思議なハートに近い痣があるなー、って前から思っていたけど、これ王家

の痣なんですか！？　つまりはわたしは王族で、アリシア姫なんですか！？

感動の再開が繰り広げられる中で、当人の私は全く状況についていけなかった。

寂しい夜

身体を休めるはずが、こんなに疲労するだなんて・・・。

疲れている理由は、一刻ほど前の陛下の言葉がきっかけだった。

＊＊＊

陛下の取り計らいで今後の話しは後日するとして、一先ず身体を休めなさいと言われ、私はメイドさんに着いて行った。

アルフレッドさんやシルヴェスターさんは着いてきてくれないのか、と少し心細く思っているとメイドさんたちが開いた扉の先は大きなお風呂だった。

「アリシア姫、こちらは湯殿にございます。そして、私はアリシア様付きの侍女となりますリリー・ブランカと申します。」

「同じく、マリアンナ・フレデリックと申します。身の回りのお世話など、なんなりとお申し付けください。」

「あ、ありがとう・・・。」

群青の髪の可愛らしい女の子がリリーさんで、紫の髪と切れ長な目の大人っぽい女の子がマリアンナさんか。忘れないよう頭にインプットしていると、彼女たちは満面の笑みでこちらに近づいた。

「では、早速お召し変えのお手伝いをさせていただきますね。」

「え、いやこれくらい一人でできるよ？」

「いいえ、これが私たちの仕事ですので。失礼します。」

「え、ちょっ待っ・・・！」

私の静止の声は聞かずに二人は次々と私の服を剥いでいった。そして、二人とも私の着ている物を珍しいと言って興味津津で見ていた。

「異世界の服はこちらと違ってとても動きやすそうですねぇ。」

「スカートの裾も大分短いですわね。でもとてもシンプルで、かわいらしいですわ。」

羞恥に悶える私を気にせず、二人は意見を述べていた。確かに、二人の格好もそうだけど陛下や王妃の格好、又お城を見ていても中世ヨーロッパの様な感じがしていた。現代の地球で王妃のようなあの煌びやかなドレスを着ることは似たものでウェディングドレスぐらいで他には滅多にないと思う。

そして、湯殿でも一人になることはなく、二人が髪も身体も丁寧に洗ってくれた。ええ、もうその時には羞恥心なんて持ってはいけないと気付きましたよ。

湯殿を出てネグリジェを着せられ、それだけでは寒いからとガウンをはおらされ、やっと今一人の時間が取れたのだった。

＊＊＊＊

私は案内された部屋に入ると、すぐさま部屋の真ん中に構えたベッドにダイブした。この部屋のベッドは絵本や映画に出てくる天蓋付きのお姫様ベッドで、いつも寝ている二段ベッドに敷いてある布団とは違って柔らかいマットが身体を包んでくれる。寝返りを打っても壁とぶつからない・・・、木が軋む音もしない。静かな部屋には時計の秒針の音しかしなくて、私は王妃の言葉を思い出した。

『私のアリシア・・・。辛い思いばかりさせてしまったでしょうね・・・。この地の記憶は貴女にないかもしれません。しかし、本来ここが貴女の居るべき場所なのです。』

王妃はそう言って私の頬を両の手のひらで優しく包んだ。慈しむような愛がその指先や温度から伝わってきた。

正直、私が異世界であるこの国のお姫様であるだなんて信じれない。その証拠がこの胸元にある痣だけだなんて、本当に頼りない証拠だ。

私を『プリモ』という異世界へ連れてきたのはアルフレッドさんで、私を最初に姫だと言ったのもアルフレッドさんだ。アルフレッドさんはアリシア姫を知っていたのかな？見た限りじゃ、歳は私と同じかそれより少し下に見られる。姫が行方不明の年数は１５年で、しっかりと覚えていられそうな年齢は少なくとも６歳くらいで・・・・ちょっと待て、２０歳過ぎたぞ・・・。少年のような風貌で２０歳過ぎたぞ・・・！？

ダメだ、こんな本人に聞かないと分からないことは考えないでおこう・・・。それにしたって、私は元の地球へは戻れないのだろうか

？私は自分のことをお姫様だなんて到底思えない。お姫様でいることを望んでなんか居ないんだ。例え、王妃がああ言っても・・・。

ここには、私のことを『雨音』と優しく呼んでくれる先生たちは居ないのだ。『アリシア姫』としてしか扱われない。そう思うと涙が溢れた。

私は、広いベッドで自分を抱くように深い眠りに就いた。

夢か現か

薄暗い部屋の中、自然と目が覚めた私は見慣れた天井があることに驚いた。

さっきまでの出来事は全て夢だったのかな？そんな気さえする。二段ベッドの下にはいつも寝ているはずの明音（あかね）が居なかった。おかしいと思い、廊下に出てみると、普段なら聞こえるはずの瞬（しゅん）の大きないびきや和泉（いずみ）の歯ぎしりも聞こえない。全くと言っていいほど、人気は感じられない。

みんなの部屋を覗いていったが、予想通りもぬけの空だ。怖くなって、私は必死に希望園内を走りまわった。どこにも、誰も居ないだなんて・・・。恐怖に支配されていく感覚は手や足に伝わり、ガクガク震えながら私は園内を歩く。

人影が広間から見え、恐る恐る近づくと、そこには同い年の奏斗（かなと）が居た。

「奏斗！！！」

頼れる存在を見つけ、私は駆け寄り、奏斗の胸に飛び込んだ。私は怖かった気持ちを振りほどくように、ぎゅっと奏斗にしがみついた。奏斗の顔を見ると、少し困ったような笑んでいた。

「奏斗・・・、どうしてみんなはどこにも居ないの・・・？」

「雨音、ここは希望園と同じ作りなだけで、希望園じゃない。夢の中、みたいなところだよ。だから、ここには僕と君しかいない。」

奏斗の手が私の頭を優しく撫でつけながら言った。

「それよりも雨音。今、君は何処に居るの？みんな雨音が帰ってこないから、心配してるよ。」

「えっと・・・、実はね・・・。」

私はさっきまでの出来事を全て話した。奏斗とは歳が一緒で、施設に入ってすぐのうまく言葉を喋れない私にとても優しくしてくれた。私も奏斗もお互いに秘密なんてなく、何でも相談した。だから、異世界や魔法とか口にしても、奏斗なら何も言わないでいてくれると信じて話した。

「そっか・・・、大変だったね。」

来栖奏斗（くるすかなと）は、私にとってとても大切な人だ。私たちの間は、恋愛や友情なんかを通り越した信頼関係があると思ってる。

「っ・・・うん。」

奏斗の温かい手が頬に移り、私を優しく包んでくれた。夢の中なのにこんなに体温が伝わるなんて不思議だなと思いつつも、私はありがたく感じた。

「・・・雨音、良い子で待ってて。僕が迎えに行くから・・・。」

「え・・・？」

奏斗は何を言っているんだろう・・・。今私の居るところは異世界

であって、あの地球ではない。奏斗はどういうつもりで言っているんだろう。奏斗は嘘を吐くのも吐かれるのも好きではない。それは、奏斗の親が奏斗に嘘を吐いて、希望園の前に手紙を入れた袋を渡して置いて行ったのが原因なんだと私は勝手に思っている。だから、奏斗は絶対に嘘を吐かないはずだけど、『異世界に行く』だなんて常人であるはずの奏斗が不可能なことを簡単に口にするはずがないと思うんだけど・・・？私は奏斗の言葉に不安を抱く。私の表情を見て悟ったのか、奏斗はぎゅっと私を抱きしめた。

「知ってるでしょ、僕が嘘を吐かないこと。」

「う、うん。」

「どんな形になったとしても、君を僕の元に連れ戻すから。」

その意味あり気な言葉の裏にあるものを私は全く読み取れなかった。お互いの表情が見えず、私の心のざわめきは収まらない。何かすごく嫌な予感がする・・・。

奏斗は私を離すと、自分の指の先を見つめた。すると、奏斗の指の先が消え始めた。

「そろそろ起きる時間みたいだね。」

「奏斗！待って・・・！」

聞きたいことも話したいこともまだあるのに・・・！奏斗に向かって手を伸ばしたけど、それはすり抜けて、奏斗の身体を掴めないまま静かに消えていった。瞬間、視界がゆらゆらと揺れて、寝る前に見た天蓋のレースが見えた。はっきりとした意識のおかげで、奏斗

と話していたことが夢であって夢でないとすぐに理解できた。まだ奏斗の温もりも、私の涙の跡も残っていることが確かな証拠だ。

奏斗を掴めなかった手を見つめていると、ノックがした。

ここにない心

どうやら私の苦悩は湯殿なんか序の口だったらしい。今この腰に巻かれたコルセットがそれを如実に物語っている。

今朝のノックの主はマリアンナであり、リリーや他の侍女と共に大荷物で部屋に入ってきた。彼女たちは「ご支度の準備をさせて頂きます」と言うと、すぐに準備に取り掛かった。そして、只今はこのコルセットを付ける段階にあるんだけど・・・。

「うっちょっ、内臓でるううううう！！！」

「大丈夫です、内臓なんて出ませんから。」

マリアンナはスッパリと言いきって更に力を入れる。胃液が飛び出そうなくらい気持ち悪いのを我慢して、コルセットを締め終えた。息も絶え絶えな中、リリーがフリルがふんだんにあしらわれた鮮やかなオレンジ色のドレスを持って私に近寄ってきた。そして、手際良くそのドレスを着せられ、靴やアクセサリー、髪型に至る全てをリリーやマリアンナは私に魔法をかけるかのようにドレスアップしていった。薄く化粧をし終えたマリアンナは満足そうに微笑み、目配せをすると、侍女の何人かが大きな姿見を持ってきた。

「姫、とってもお綺麗ですわ・・・。」

リリーがうっとりとした目をこちらに向けてそう言った。私は鏡に映った姿を見て、息をのんだ。・・・目の前に居るこの人物は、本当に自分なのか・・・？そう疑いたくなるくらい、姿見の中の自分は綺麗になっていた。今まで自分は一度も告白されたことのない冴

えない女だと思っていたけど、人間は化粧や着ている物だけでこうまで変われるものなのか。このドレスを選んだであろうリリーやマリアンナは相当センスがあるんだろうな、と感心する一方で、マリアンナは私を見ると今日のスケジュールを早口に言った。

「今日の午前中は仕立屋を呼んでおりますので、姫のドレスや靴など揃えましょう。午後は私とリリーと共にマナーのレッスンです。本当は家庭教師を呼んでレッスンしたいのですが、王室御用達の教師の連絡がつかないので、僭越ながら私共がお教えさせていただきます。そして、夕方からは晩餐会が開かれます。ですので、今日１日で最低限のマナーをみっちり頭に叩き込んでもらいますよ。」

アナウサー顔負けの早口に私は目を剥くことしかできなかった。しかも、異世界に来てすぐに晩餐会に参加しなきゃいけないとか・・・、無理無理無理無理！！！もう、このコルセットだけでも今日はいつも以上に疲れたと言うのに・・・、私の心労はまだまだ始まったばかりらしい。

仕立屋さんが来て、私のドレスを見立てると言って、華やかなドレスがぞろぞろと部屋に入ってきた。おいおい、どんだけドレス持ってきたんだよ・・・と心の中でツッコんでいると、仕立屋さんとリリーとマリアンナが次々に私の身体にドレスを当てて決めていった。知らない内にどんどんドレスが決まっていく中、お金の心配ばかりしていた。百着以上のドレスをお買い上げしたらしいが、それは持ってきたドレスのほんの少しであって、理解の範疇を超えた数に私は頭痛を覚えた。

軽い昼食を取ると、マナーのレッスンが始まった。実はマナーにつ

いては高校進学の際に一通り学んだため少し自信がある。百合ヶ丘学院はお金持ちの生徒が多いため、紳士淑女を育てるという名目上において、行事ごとにパーティを催したりするのだ。その際にマナーがなっていないと恥をかくのは自分であると悟った私は一応勉強したのだ。おかげで、食事についてのマナーはオッケーサインがリリーから頂けた。

「予定よりマナーのレッスン時間を早く切り上げることができましたので、念入りに身支度ができますわ。」

「え？このドレスじゃダメなの？」

不思議に思った私は自分のドレスを摘み上げてリリーに尋ねた。リリーは微笑みながらこくりと首を縦に振る。

「そのドレスでは晩餐会には少々ふさわしくありませんわ。いくら家族の前と言っても姫様たちは王家の人間ですから。」

いまいち理由が分からないけど王族の人間であるということはやはり面倒らしい。私は黙って、再び彼女たちのかける”魔法”に身を委ねた。

されるがままの状態から瞳を開けば、姿見にはやっぱりそこに映っている人は私に見えなかった。淡いピンクの花模様が美しいふんわりとしたドレスはピンヒールのパンプスと同じくらい、私の足取りをふらつかせた。やっとさっきの格好で歩くのに馴れたと思ったのに、これではこけてしまわないか心配だ。そんな私の心配も知らずに、マリアンナは私の髪をキレイにまとめ上げた。髪を結い上げたためおかげか、さっきより背筋もしゃんとし、首筋もスッキリしたために、首元の宝石を一層輝かせた。

「アリシア姫、何か心配事がおありでしょうか？」

リリーが私の顔を覗き込みながら、心配そうに紺の瞳を揺らめかせた。小さく微笑んで、私は「何でもないです」と答えるのがやっとだった。

気付いてしまったのだ、どんどん、どんどん、私の心はここにあって、ここにないような、そんな奇妙な感覚と共に時間は過ぎ去って行くことに・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5581u/

姫と呼ばないで！

2011年9月4日12時03分発行